

## 調査報告

### 鬼師の世界

——黒地：山本鬼瓦系(2)——

The World of Ogre-tile Makers

— “Kuroji” as Fired Tiles: the Yamamoto Onigawara Line (2) —

高原 隆

TAKAHARA Takashi

愛知大学国際コミュニケーション学部

*Faculty of International Communication, Aichi University*

*E-mail: ttakashi@vega.aichi-u.ac.jp*

#### Abstract

There exist three members of the Yamamoto Onigawara Line; the Yamamoto Onigawara Co., Onikin, and Oniei. The uniqueness of this group is that they are blood relatives. In this article I depicted Onikin and Oniei. The Yamamoto Onigawara Co., has been described in the last article. While depicting Onikin and Oniei, I tried to show the social environment in those days in order to more fully understand their commentary. The interesting aspects of the world of Ogre-Tile Makers in this article would be the relationships between a master called "Oyakata" and artisans called "Shokunin" in the old days. In the contrast with the past, there exists a serious problem in the present which is a shortage of good artisans among ogre-tile makers.

#### 鬼金

山本佐市が始めた山本鬼瓦に、佐市の出である神谷一族の中から最初に呼応したのが甥の神谷金作であった。ただ残念ながら金作がいつ頃、佐市の山本鬼瓦へ入ったのかは不明である。また佐市がいつ頃山本鬼瓦を創業したのかもはっきりしていない。手掛かりは山本家へ神谷佐市が養子として入籍した日であり、それは明治36年（1903）5月21日となっている。佐市の妻「よし」の祖父、源太郎の弟が三州鬼瓦の元祖といわれる山本吉兵衛であり、明治37年（1904）4月10日に他界している。佐市と吉兵衛が重なり合うのは僅かに約1年であるが、佐市は山本吉兵衛と何らかの接触を持ち、鬼板屋を始めたものと思わ

れる。一方、金作は大正4年(1915)に新家となり、鬼金を興している。神谷金作は明治27年(1894)に生まれており、鬼金として独立したときは、年齢は21歳前後である。これより考えられることは金作は小僧として山本鬼瓦に入り、職人として年が明けるや何らかの事情ですぐに独立したのではないかということである。

鬼金の創業時の話はやはりその家の言い伝えとして残っていた。第三代鬼金に当たる神谷昭正が次のように述べている。

山本さんの創業者が、うちの創業者の叔父さんになるんですよ。弟子で入って、山本さんに入って、辞めたんですよ、弟子を。そのときは鬼が全然売れないときで、職人さん引き連れて、分かれたんですよ。

この話からは詳しい当時の状況はわからないが、21歳頃の金作が何人かの職人と共に、山本鬼瓦から独立し、鬼金を開始したことを示している。金作については断片的な話しか聞けなかった。金作の長男である、第二代鬼金、神谷直行はインタビューをした平成15年12月8日の頃すでに85歳を越えており、昔を思い浮かべながらゆっくりと話してくれた。

小さい頃はね、あの、工員さんが16人くらい見えて、お弟子さんが6人見えた。ほいですから賑やかですわ。あの工場へ、あの、土遊びに行っって、いろいろ、あの、何だね、遊んだもんだね。

21歳で独立した金作は息子の直行が子供の頃には、多くの職人を抱える鬼板屋に鬼金を成長させていたことが見えてくる。気になる金作の鬼板師としての腕前だが、直行は次のように語っている。

高原：あの、本人(金作)は、あの、鬼瓦を作られていたんですか。

直之：あんまり作りません。

高原：作らない？

直之：ほう言うことはね、自分も腕前はあまり無かったわけですよ。ということは、あの、山本さんのお祖父さん(佐市)ていうのは、鬼板師じゃなかったんですよ。佐市さんがね、鬼板師じゃなかったもので、ほで、隣の鬼兵さんだったかな、鬼忠さんへ遊びに行っちゃ、いろいろ教えてもらって<sup>1)</sup>。ほで、家から、あの、この、家から通って、あの、しやがったんですよ。ほですから、自分に腕が無いけれども、あの、結局、何とかやろうという経営…経営知識ですか…ほういうことは非常にね、頭、

わかっとったもんで。

すぐ隣で話を聞いていた妻の道子が一言継ぎ足してくれた。

販売のほう、力入れとった。

直之は父、金作の仕事の様子を述べている。

バトンを（直之に）渡すまでは、窯を、窯焼きだね。窯を、鬼を焼くのが仕事で。作るのは工員さんがやってくれるから、焼く方、焼いて仕上げて…なんていうのが金作さんの仕事でしたね。

で、この付近の仲買さんていうんですが、結局、あの、鬼なんかを買い集めておく人が居てね、ほういった所へ、鬼を出す。したがって、あの、集金も一切意識してやっ  
とらんかったね。

金作は性格的には、かなり厳しい人だったようである。金作の甥に当たる治之（第二代鬼  
栄）は小さい頃の、金作について思い出を語っている。（第1図参照）



第1図  
初代鬼金 神谷金作

金作さんっていう人はわたしが子供のときから厳格者だった。うん、なかなか。怖かったってこと、怖かったってこと。白黒はつきりせられる。昔はお風呂も無かったもんで、本家へ入れてもらいに行っとったわけです。わたらの子供の頃は、まだ貧しい頃だもんで。金作さんのところ、やっぱり、うーん、厳しかった。

そういった厳しい金作を父に持つ神谷直之が第二代鬼金である。大正7年(1918)生まれである。運良くインタビューへたどり着け、本宅で話を伺うことになった直之は85歳であった。直之の鬼板師としての特色は愛知県瀬戸窯業学校を卒業していることである。私が今回の調査で確認した限りで、窯業学校を出ている鬼板師が高浜にはすでに4人居る。第二代鬼源の神谷勝義、初代鬼作の杉浦作次郎、第二代上鬼栄の神谷知佳次、第三代鬼長の浅井邦彦である。このうち、瀬戸窯業学校を出ているのが、神谷勝義と杉浦作次郎である。直之は高浜では三人目の瀬戸窯業学校出身の鬼板師ということになる。直之は高等小学校を終えて瀬戸で下宿をしながら瀬戸窯業学校へ5年間通っている。父、金作と二代目鬼源の神谷勝義が、直之に対して窯業学校行きを強く勧めたと言う。

やっぱり図面を引くにしても、ものを作るにしても、やっぱり基本が要りますのでね。ほういうことで、基礎的な知識を得る為に、窯業学校へ行っただ訳です。

当時、一学年は32名であり、瀬戸の人が中心ではあったが、全国から学生が集まっていたという。直之は学生たちの出身について語っているので、どういった人が窯業学校へ来たのかがわかる。

家が粘土屋だとか、ほいから、あの、今いう、鬼瓦の関係、ほいから、瓦関係。大体があの、瀬戸の、瀬戸に在るもんですから、瀬戸の焼き物の、窯焼きさんの息子が多いですね。あの主力はね。

直之は窯業学校での教科内容についても語っている。当時の窯業学校で何を教えていたかが見えてくる。

大体ね、あの、5年間のうちで、2年は一緒にみんなやって、ほいからあと、3年を専科って言って、あの、轆轤、模型、絵画と、3つの科に分かれて。結局自分の目指す、もの作りがええというのは模型の方、絵の方がええっていうのは絵の方、轆轤回しは轆轤回しの方で。ほいで、みんなそれぞれ選んで、あの、修行したもんだね。

直之は模型へ行ったという。どういった科なのかを話してくれた。

結局、動物の模写をしたり、あの、茶碗、井、一般に焼き物の造形が主で、あの、修業したもんだね。

なかでも、「石膏型を作るのが主であった」と直之は言っている。

石膏、石膏のやつだね。つまり、原型も、原型も無論作るですから。原型から今度、あの、量的に作らないといかんもんで。あの、石膏型の石膏を溶いて、流し込んで、型を作るわけですね。ほんで、そいつを、土を、土を込んで、あの、幾つか、3つ、4つ、5つと数を作るわけだね。

どういった原型を作っていたのかを直之に聞いてみた。

動物の、あの、動物の模写だとかね。ほいから、あの、なんだい…ま、主にそういった事が多いでねえ。

原型をスケッチするために外へ行くことは無かったらしい。

市場に出回っているようなものを買ってくるだけでね。その形をまた、写して、作り上げていくわけだね。粘土捏ねてるとか、あれだね。

直之の模型の先生は、橋爪英雄といった。模型が専門ではなかったが、美術学校出身の先生であったという。直之が窯業学校を卒業したのは昭和12年（1937）で、18歳の頃である。卒業するや、家業を継ぐために鬼金へ入っている。

卒業してから、あの、家業の鬼瓦専門に、あの、何だね、ええ、焼く方の手伝いを。ほいから作る方の、工具さんの仕事の下準備だね。ボール型を切ったり、ほいから、石膏型の型を作ったり。ほいから、あの、図面を引いたりというようなことをやっとなね。ほいで、直ぐ、兵隊へ行っちゃったかな。5年間ぐらい。

直之が兵隊に採られたのは昭和14年である。昭和17年に現役で日本へ戻り、翌18年に妻の道子と結婚し、さらに19年に再度、召集を受け、上海の奥の塩城へ行っている。帰国したのは終戦から半年経った昭和21年であった。直之の経歴から伺えることは、窯業

学校卒業まで、鬼板師の修行を正式に受けていないという事実である。卒業して一旦は鬼金に入ったものの、その2年後には兵隊に採られ外地へ送られている。直之が昭和21年に日本へ戻って来た時は既に28歳になっていた。ところが鬼瓦の需要はまだ当時の日本には無く、鬼金ではコンロや土鍋などの土器を作っていた。父、金作やその家族が協力して土器の仕事をしていたのである。鬼瓦の仕事を開いたのは昭和23年の頃だという。鬼瓦が本格的に出始めるのは27、8年頃からで、元々、鬼金に居た職人が少しずつ戻って来たという。

ところが直之は軌道に乗り始めた鬼金の仕事から離脱する。「鬼瓦」から「瓦」へと直之は転身したのである。ここに厳格な父、金作と直之との確執があるように思える。また直之は鬼板師としての修行の機会を戦争のために奪われていた。

結局ね、鬼も鬼ですけど、あの、名古屋の駅、終戦後に名古屋の駅降り立って、あの、眺めるに、焼野原になつると。名古屋がね。こりゃー、あの、鬼よりも量的な瓦を作って、伸びた方が良いつていうような事で。あの、鬼もやりながら、瓦を始めたで。ですから、瓦を始めたのが26年頃ですか。

ほいで、結局、あの、瓦をやるなら、流行の赤瓦をやるということで、ほいで塩焼き瓦を始めた。

当然の事ながら、金作からは反対されている。直之はおそらく初めての事であったと思うが、金作の意向に反して自分の道を進んだのであった。

最初は、私んところは非常に道に遮られとって、屋敷がああ、2箇所も3箇所も散り散りになつとるもんでね。親父さんは「まあ、とても利用できん。作るのに難儀だであかん」と。「鬼の方をやれ」という事をしきりに言われたけどね。わしは、あの、不器用ですもんね。で、どないこと、あの、鬼をやるような器用じゃないもんで。

鬼金は、直之による塩焼き瓦の開始によって、金作が鬼瓦を、直之が瓦を作るという、二重の経営体制を採り、事業の拡大を目指したのであった。ただ直之の行動はそれ自体、父金作からの独立を目指していたといえよう。

(父は) 我が強いもんですから、とても頭をしょつちゅう抑えられとるもんだから。反発があつたでね。今、はっきり覚えてる。ほいで、自分の思った事を、友達が勧めの事をやろうという腹が決まったですけどね。

直之はそういった状況から出発しているので次のように当時の気持ちを語っている。

ほいですから、もう、そういう風で無理に始めたもので、まあ、死に物狂いでした。

塩焼き瓦を努力して、やっと軌道に乗せかかった頃、瓦の世界は赤瓦からトンネル窯の時代へ入っていた。直之の苦勞がここに始まる。

塩焼き瓦始めましてね。ところが、最初は小さな5千枚窯の窯は小さかったもので、ほいでこれを1万枚瓦の窯にせにゃあかんという事で、1万、2万窯、2つにした訳ですよ。ほいだけん、今はその建物、その建物が残っとるわけですけども、やれやれ、これで皆さんと一緒に肩を並べられるなあと思ったところが、あの、頭の切り替えの早い人がたは、トンネル窯を始めてた。昭和44、5年頃だね。わしが始めたのは46年(1971)です。その前から、あの、トンネル窯始めて。その当方で14、5本あったかね。

金作は昭和43年(1968)に亡くなっている。直之は金作から文字通り自由になり、新たにトンネル窯へ挑戦したのである。ところが、金作からは自由になったが、金作の指摘していた鬼金の敷地の条件からは自由になっていなかったのである。

敷地が狭ばいで、あまり長い、あの、生産能力の、能率のええ窯はやれんぞということで。無理に始めただけだね、普通の60メートルから70メートルくらいの窯が、わしのは45メートルしかなかった。ほいですから、結局、生産のピッチを落とさなきゃ、製品のいいものが出てこんもん。ほいですから難儀しまして、ほいで生産を上げるのに難儀したわけですね。

結局、あの、生産が上がらん為に、あの、最も忙しい時と、こういう山が有りますけどね。忙しい時には能率が上がらん。ほいから、悪い時には、能率が上がらん代わりには、あの、在庫が余り溜まらんで済んだけども。ほや、やっぱり、あの、決算がね、赤字経営。赤字経営が続いた訳ですけども。ほで、せがれが、経済学部出とりますもんで、帳面見て、こう、「とても親父さん、あかん」と。「こんな風の商売やっっちゃあかんで止めまい」ということで止めた。

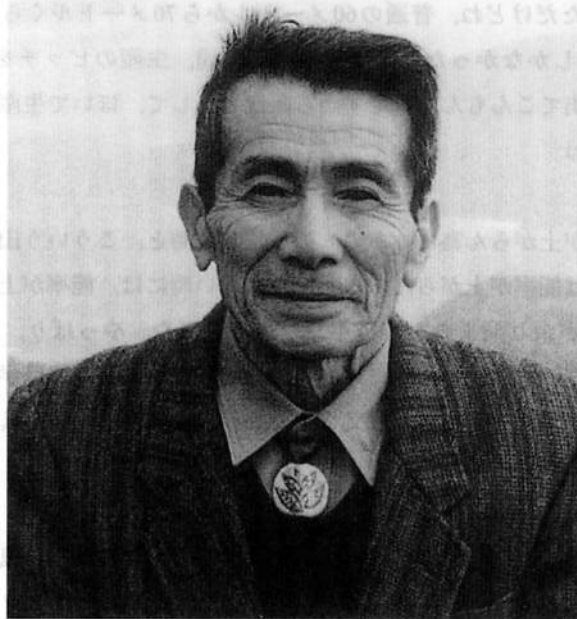
昭和46年から始めたトンネル窯を10年やり、昭和55年に中止している。鬼金の全盛時代は、鬼瓦と瓦を合わせて、職人が25人くらい居たという。ところが、トンネル窯による

瓦生産を止めた時点で、金作の元で働いていた鬼瓦の職人が4人残っていた。結果、直之は金作の鬼瓦へ戻ったのである。

結局ねえ、あの、鬼の設備だけは残っとります。まあ、石膏型すら有りますもんで。まあ、「とても瓦じゃあかん」と。夫婦で、あの、「あかんのなら、鬼をやっていくより仕様が無い」と。で、また、工員さんが<sup>よつたり</sup>四人居ったもんで、続いてやって来とったもんで、ほいで、鬼の窯は無<sup>しろじ</sup>いけれども、生地を専門に白地を作った。

まあ、55年にトンネルを、釉薬瓦を焼くのを止まったわけですけども、ほいで、「何せ<sup>な</sup>る」、「何せ<sup>な</sup>る」って事で、随分、あの、迷いましたけどね。やっぱり、慣れた事やるより、それより他に方法は無いような事で、石膏型を利用して生地を作ったんですね。はい。

直之は瓦の世界に大きく迂回をして、瀬戸窯業学校で学んだ石膏型、そして出発点でもある鬼瓦の世界へ自らの意思で再度入り、鬼瓦を作り始めたのである。直之が62歳の頃の出来事である。直之はそれ以後、80歳過ぎるまで鬼瓦を作っていた。妻の道子が次のように言っている。(第2図及び第3図参照)



第2図  
第二代鬼金 神谷直之





第3図 鬼面 神谷直之作

結局終わり頃はね、大きな物はよう受けんから、布袋さんを作ったりとか、そういう物を。ようあの、大黒さんや布袋さんをね、頼まれる時、作っとりました。うちのは。

瀬戸窯業時代に直之は動物などの生き物を作っていたというが、円環を描いて出発点へ戻って行ったのかも知れない。直之は自分の人生を振り返り次のように言っている。

何しろ、焼き物、瓦、鬼瓦まで、一筋に生きて来れました。

本宅で直之とのインタビューを終えると、またしばらくお茶などをいただきながら話を伺っていた。そのときに写真やその他の資料を見せてもらったのである。その中の一つ変わった資料があった。『拙い纏め』がそれである。直之が折に触れ書いてきた文章や記事が丁寧に文字通りまとめてある。直之は瓦や鬼瓦と格闘しながら日々の考えを文字にしていたのであった。「陶器瓦月報」や「新聞かわら」などに数多く書いている。直之の瓦に対する想いを綴った一文をここに引用したい。直之の性格の一端が窺える。直之は事業に追われながらも、日本の屋根に美の世界の実現を夢見て瓦を作っていたように思われる。

## 『瓦の美しさ』

大和路を歩いて一番心温まるのは、やはり古いお寺のたたずまいである。夕暮れ近い野道をゆきつく所、静かに入母屋造りの本道がうっとり。背後に連なる低い緑の山を背景に中空高くそびえている。薄鉛色の瓦が漆喰の碧空の流れの雲に調和している。その白さが古刹のさびた風情を一層ひきたてている。近寄って見ると瓦は古く巴や唐草につけられた蓮華模様に淡い苔が一面に生えている。年代の長さで移り変わりに耐えて来たたくましさを憶ひたうっとりとするのみである。

直』

鬼金の現状については直之と道子が次のように述べている。

直之：現代、その、鬼を使うのが少のうなって来てるもんだん、もう今、ほとんど廃業に近いような、休業になっとる。(全盛期に比べて)

道子：4人居った職人さんも、まあ、今1人になっちゃって、その方もうちのお父さんより上だもんだんね。んで、1人、ま、現在残っとただけど、まあ、うちのお父さんとよく似とる歳ですもん。まあ、注文が来ると、去年くらいまでは出て来てもらってやとったりしとったですけどね。注文もそんなに来んし、注文受けるほどのこたあ、ようやれんしねえ。

鬼金は初代金作の時代から腕の良い職人を集めて、鬼瓦を生産して来た鬼板屋であった。しかし、直之が62歳で鬼瓦の世界へ戻って来た時、鬼金の職人は既に4人になっており、以後、その4人の職人体制を若返らせること無く、現在へ至ったのである。フィールドワークをしながら黒地の「鬼師の世界」を見て来て、この件に関してわかった事がある。大きく2つのタイプの鬼板屋がある。ひとつが親方が腕のある、実力派の鬼師である場合で、自ら鬼瓦の製作を率先してする鬼板屋である。もう一つのタイプが、親方は鬼師としての技量を十分に持たないが、鬼屋の社長として、何人かの腕のいい職人を十分に抱えている鬼板屋である。第一のタイプの場合はたとえ他の職人が居なくなっても、親方1人でもその鬼板屋は存在可能である。第二のタイプの場合は、職人が諸般の事情で居なくなれば文字通りやって行けなくなってしまう。昔のように、手造り鬼瓦全盛の時代は、優れた職人がたくさん居て職人の若返りや採用は頻繁に行われていた。ところが現代は手造り鬼瓦の生産量が全体的に昔と比べると激減しており、それと軌を一にして、技量のある職人が急速に減って来ているのである。優秀な職人の確保、育成が鬼板屋の存続を左右する時代になって来ている。鬼金は現在、三代目鬼金、神谷昭正が注文に応じて、型起こし

で白地を製作している。

#### (株)鬼栄

山本佐市が興した山本鬼瓦から2つの鬼板屋が生まれている。鬼金と鬼栄である。佐市自身は鬼板師ではなかったが、経営感覚に秀でた親方として山本鬼瓦を盛り上げていった。その佐市の元へ、佐市の兄である喜之助の息子、金作が小僧として弟子入りした。そして、大正4年(1915)山本鬼瓦から独立して鬼金を興している。さらにその金作の鬼金へ、弟の栄一がやはり職人を目指して加わっている。いつ鬼金へ入ったのかは定かではない。ただ鬼金から独立したのは大正12年(1923)であり、鬼栄を同時に創業している。このように、佐市の鬼板屋創業は、神谷家の中に二軒の鬼板屋を新たに誕生させたことになる。

初代鬼栄の神谷栄一は明治31年(1898)6月25日に生まれている。そして昭和61年(1986)10月18日に亡くなっている。鬼金で何年修行していたかは定かではないが、鬼金と鬼栄の創業年度の違いから推測すると、5年から8年ほどではなかったかと思われる。鬼栄を始めたのは栄一が25歳頃の事であった。

栄一の父、喜之助は魚の行商をしており、最初は兄の金作が父と魚を売りに歩いていたという。ところが、金作が山本鬼瓦へ入ったことにより、金作に代わって弟の栄一が喜之助と魚を売っていたのである。金作が何年間山本鬼瓦の佐市の元にいたのかはわからないが、職人としての年を明けて、大正4年に鬼金となり、人手を必要とした為に弟の栄一に声を掛けたものと思われる。

魚の行商は日々の現金収入としてやっていたものと思われ、鬼栄になってからも家業の農業は続けていたという。二代目の治之は昔の思い出を次のように述べている。

うちも兼業農家で、多少田んぼも有りまして、田んぼをやりながら商売(鬼板屋)もやっとな。二本立てでやっておりました。

栄一は親から譲り受けた田地に自ら土を運んで埋めて、鬼栄を始めたという。

出た頃は、もうこら田んぼだっただけなもんで、ほいで、うちの今のお袋が、まあ、死んだお袋と親父が大八車でね、土を向こうから、上から持<sup>か</sup>って来て埋めて、設置して始めたげなって話を、苦勞、そういう苦勞話は聞いとったんですよ。うん、とにかく一から始めないかんもんで。

このときは本当に大変だったらしく、治之の妻、愛子は義理の母に当たる「すま」からや

はり同じ話を聞かされており、すまはこの作業をしている時には妊娠しており、それが原因で流産したと言っていたという。鬼栄の土地造成の後には、顧客の開拓が待っていた。栄一は苦勞してお客を獲得して行ったらしく、顧客の開拓も鬼栄の創業時代の苦勞話として残っている。

兄と、そう言っちゃいかんけど、その、「お客を持ってくな」って言われて、わしゃー、まあ、新規のお客を作ったっていう事は親父は言っとったけど。向こうじゃ、ほんなこと、思っとらんかもわからんけども、親父はそう言っとったね。新しいお客を作る、開拓して。

ま、われわれは、親父の後を引き受けとるだけで、お客も、まあ、色々代わるけども、まああの、何とか最初からやれたということが。

栄一の鬼板師としての実力を息子に当たる二代目鬼栄の治之に聞いてみた。すると直ぐ側にいて事務を執りながら話を聞いていた妻の愛子が次のように話してくれた。

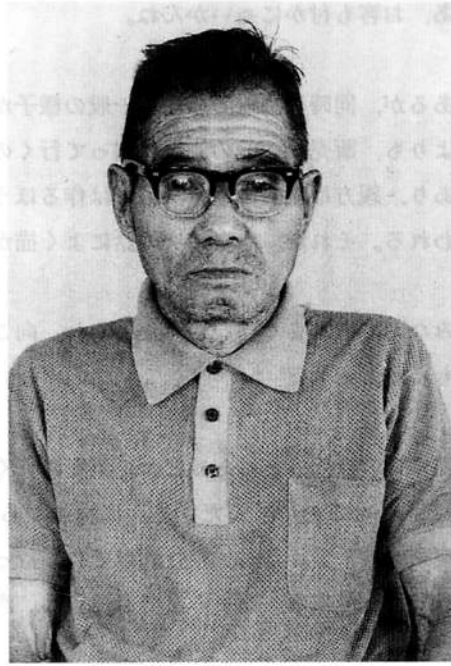
うちのお祖父さんなかなかね、あの、腕良かったよ。左利きの人でね、器用だったよ。左利きの人器用だって言うじゃないですか。結構器用でしたよ。いい鬼をね、作ってましたよ。あの、勢いのあるいい鬼をね、あの、作りましたよ。

ただ残念ながら、栄一の作った鬼瓦は鬼栄には残されていない。愛子に続けて治之は親方としての栄一について話してくれた。(第4図参照)

もちろんね、あの、それだけ職人が居ると雑役ばっかです。ほんと。うん。ほやー、どこの親方でも大体ほうじゃないかな。職人さんは作るだけで。ほいで、図面引いたり、そういう事を、ほいから見積もりをやったり。そういう事は親方しか、やらへんもんで、雑役ですよ。ね。(規模が大きくな)ってくほどあの、工場へ入れないわね。うん、ほだでねー、作る暇は無いね。

腕は有っても、作る時は無いわね。わしらの覚えのある頃は。うん。

これに対して、「作らないと腕が落ちるといったことは無いのですか」とたずねてみた。これは作らない親方に対する素人の素朴な質問である。



第4図  
初代鬼栄 神谷栄一

治之：やっぱり，そういう事は言うわね。  
 愛子：やっぱり作ったほうが上手くなるやろう。  
 治之：ほや，何でもほうだね。  
 愛子：あの，やっぱ，それから，スローになっちゃうね。作りが。あの，あれが，作るのが，速さがね。それで，作り慣れ，慣れないもんだからね。  
 治之：こいでね，あの，職人さんに作らせるのは率のええ分は作らせて，率の悪い分は親方が作るわけね。

「その率の良い，悪いっていうのは，どういう事ですか」と続けて聞いてみた。

単価の安いもん。工賃が，あの，出せれんようなもんは，我々にこう，人工<sup>にんく</sup>ただでこうやってあげるっていうのは。

ほだで，家紋を彫るでも1つ半日ぐらい掛かるもん，職人さんに何千円も出せれん。ま，今だと何千円も出せれんでしょう。そうすつと，自分でやると。こういうのが，どこの，あの，うちでも有ったじゃないかな。うん。ほいで，職人さんのいないところは自分で作らにゃしょうが無いもんで，あの，作って焼くわけだもん，数は少ないわね。人が多いと，窯数が多いわけね。出来てくるでね。ほいだと，販売もそいだけ販

売せにやいかん。まあ、お客も付かにやいかんね。

栄一についての話なのであるが、同時に、親方の仕事一般の様子が治之の話から伝わってくる。なぜ、親方が作るよりも、販売その他の雑役に回って行くのかが見えてくる。それでも現在とは違った面もあり、親方は親方の性分次第では作るほうへ時間を割くことも十分可能だったようにも思われる。それが、治之の次の話によく描かれている。

まあ、昔は、売り込みなんてあんまりせなかったもんね。向こうから来ておくれるっていうのが多かったもんね。

うん、まあ、年に一回ぐらいは行っとったけどね。集金に行くもんで。年に、盆、正月は集金に行くもんで、私もこの、まんだ学生、高校生ぐらいの頃は千葉まで集金行っとったもんね。東京へ、千葉。うん、夜行列車でね、行っとったんですよ。日帰りね。夜行の日帰り帰って来る。泊まらなくてね。うん。汽車の中で寝て、朝着いて。

ただ一般的に言って、腕のいい職人は昔は十分にいたらしく、自然、親方と職人との仕事の分担ができ、分かれていく傾向にあったようである。

われわれの頃は（治之が栄一と仕事をしていた頃）ほとんど、工場に入っておったのは少ないだ。その頃は、窯と粘土を作る、あの、土錬機を掛けて粘土やるですよ、これをやるが一生懸命で。それが仕事だった。窯と。ほで、昔は薪でしょう。薪を、船、この川に、だいたい船が着くと、それを車で、リヤカーで運んで、ほいでやったわけです。そういう仕事が、目に見えん仕事が。

そういう事をやって、親父も私も、ほいから荷を出すには駅は北新川って言う駅やけども、昔みたい、今みたい、アスファルトではなく、地道でえらい坂を上がって行って駅へ出す。そういう仕事が。もう工場へ入ってやっとなる（暇がない）…。どこの親方でもそうじゃなかったかなと思います。うん。今はまあ、窯も楽になったし、自由が有るもんで、工場へ入れる。また、入らな回ってかんもんで、やるだけど。

今とは違って、昔は作る人がいくらでも在ったわけですわ。作る職人さんがね。こいで、職人さんも盆、正月やなんかに、よう移動があったわけ。引き抜きで。金の<sup>かね</sup>。

このように、職人が現在のように少なくなってきた時代とは違い、昔は供給過剰のような状態で有能な職人が三州全体にプールされており、割と自由に違う鬼板屋に移っていたのである。それ故、鬼板屋の流儀や技術はこういった職人を通して他の鬼板屋へ伝播して行ったと言えよう。そしてその事によって三州全体における鬼板作りの技術のレベルを押し上げていたのである。ただ具体的な職人の名前は通常は各鬼板屋で語り伝えられるのみであり、出来上がった鬼瓦は各鬼板屋の製品として屋根に上り、その鬼瓦を作った職人の名は社会に残ることはほとんど無いといっても過言ではない。

栄一についての話から手造り鬼瓦の時代の様子が同時に浮かび上がって来たわけであるが、栄一の性格を最後に書いておきたい。一言で言うと「面倒見のいい親方であった」らしい。

昔はね、給料も払わなかったなあと思うけど、まあ、あの、盆、正月やなんかにお金を、まあ、渡しとったぐらいだ。

昔はみんな、あの、私もあの、集金しとったけど、半年勘定だったもんね。半年で閉めて、半年で集金をしとったっていうような話だもんで。あの、要るだけが、前貸しっていうのはまあ、面倒見が良かったっていうのが…。割と、まあ言やあ、貸してやったっていうのが面倒見が良かったっていう、そういう話を聞いてとったですよ、はい。

第二代鬼栄、神谷治之は昭和11年（1936）4月7日生まれで、2回目にインタビューした時は64歳であった。鬼栄へは何度も足を運んだ。その度に仕事を中断し、相手をしてもらったわけだが、いつも見る治之は仕事場でへらを巧みに使いながら鬼瓦を製作している職人としての鬼板師の姿であった。インタビューは2度に渡って行った。1回目が平成11年（1999）11月26日、2回目が平成15年（2003）11月7日である。場所は仕事場の前の道路を横切つてある鬼栄の事務所であった。その事務所はそのまま、裏の本宅へと続いている。

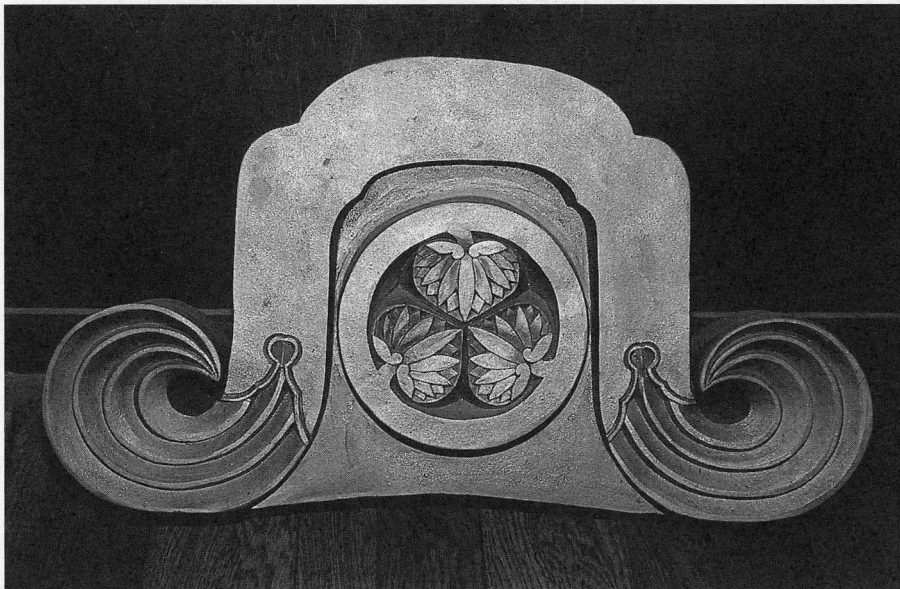
治之は9人兄弟であった。ところが5人が早く亡くなり、長男も死に、次男であった治之が栄一のあとを継ぐことになったのである。（第5図及び第6図参照）

土は中学校卒業してからですね。その間は百姓を手伝いしておりました。中学校卒業する頃は。

作業場で遊ぶはしょっちゅう。土はいじっておりましたが、作るまでは行きません



第 5 図  
第二代鬼柴 神谷治之





でした。手伝いはやってましたね。

昔は食べ物のせいもあったかもしれませんが、早くというのが。4歳から5歳くらいでみんな死んでっちゃう。そういう時代だったから。長男も4つくらいで死にましたから。写真は有りますけど。それで「やらないかん」という事は。「家業を継がなきゃいかん」という事は。

治之は刈谷高校定時制へ行き、事実上、中学校を卒業すると鬼栄に入り、働き始めている。昭和27年（1952）、治之が16歳の頃の出来事である。その頃は朝鮮戦争中（1950～1953）であり、日本が戦後復興を開始した時代であった。

いや、別に言われたでやったわけじゃないんですよ。なんとなく自然に始まったという事ですね。まあ、その頃はまだ時代も良かったからね。作れば売れるという時代だったから。やりよかったですよ。

やはり今みたいにガス窯の時代じゃなかったから。土窯の時代で焚物を入れて焼くものだったので、そういう手伝いもやり、それから粘土、捏ねることから全部、全部作業をやってきました。今は分業化して、配合粘土を買って。現在皆さんそういう具合なんですけど。昔はみんな、粘土を土鍊機という機械に入れまして、今みたいにブレンドしてある土じゃないもんで、いろんな粘土を取り寄せて、それを練り合わせて、それをやる。冬はまあ冷たいし、大変な仕事でしたけど。

やはり気になるのは治之が鬼栄の誰に習ったのかであるが、治之は次のように答えている。

家、別にねえ、これも自然と覚えて行ったんですよ。別に先生というのはなくて。だいたい皆さんそうだと思いますけど。親父やら、職人さんの仕事を盗みながら目で見えてやっていくというのが。だいたい、石の上に3年と言いますが。3年じゃちょっとあれですが（笑い）、5年位は。

鬼栄には治之が入った頃には本当にできる職人が10人くらい居たといっている。この職人の数からも、当時、戦後、順調に立ち直り、鬼栄を軌道に乗せてやっていた事がうかがえる。10人くらいの職人が同じ鬼板屋に居ると何が起きるかについて治之が語っている。まず親方は次のようになっていくようである。

工場に入る以外のことが幾らでもありまして。窯焚き、粘土を作る、土練り、土打ちと言うんですが…。土を打ったりする仕事。それから配達。そういうのはやっぱり人任せに出来ないことで、家の者でやっと思ったもので。割と工場にはなかなか入れないですよ。一般的には、まあ、暗くなってから入るとか、そういうのは出来るけれど…。

もうひとつの重要な親方の仕事が鬼瓦の図面引きである。

一つの鬼瓦を作るには図面というものがあまして、その図面を引くのが親方の、今で言うならば、社長の仕事でして、それを職人さんに渡すと、それを作っていくのが職人さん。そういう、やっぱり作れるほうが親方じゃなきゃ出来ないことだもんで。だいたいみんな腕は有るんですが、なかなか作る…時間的になかなかねえ。

作る側の職人は鬼栄のように職人が10人も居ると、親方の引いた図面からほぼ同一の鬼瓦がそれぞれの職人から出来上がっていくかといえば、そうではないらしく、実態は次のように展開するようである。

統一というのではなくて、同じ1つの名前のもを作るのでも、どこのメーカーというのが皆さん違いまして、また、うちでも、作る人によって、個性がみんな違うことと一緒に、作る製品もずいぶん違いました。上手い人もあれば、下手な人もある。速くて上手い人と、時間かけても下手な人もあるもんで。

でも、単価の面では同じですわ。そういう組合の協定価格が有るもんで。工賃台帳に基づいてやってるもんで…。「手を抜いてる」だとか、色々な事もありましたです。職人同士だと、ある程度、人を見て、「あれでいいのか」という様な事もね。そういう面では大勢使えば使うほど難しいですわね。

そういった鬼瓦が、鬼栄の鬼瓦として銘打たれて出荷されるのである。さてその出荷先であるが、現在と昔とは大きく変化してきている。

昔は「仲買」っていうのが有りましてねえ。中間業者というのがありまして、注文しておくれるだとか。どこ行ったのかわからない製品が多かったですよ。今はだいたい、暇があればそういうところ、見に行くから教えてもらったり。現場を見に行くんですが。昔は足も無い、金もない、暇も無いというような状態で、どこに施工された

のかわからないような、写真には写っていないようなものがいくらでも在りました。最近は何とか、こう、足も有りますんで、飛んでいきますけどねえ。

この中間業者の存在が昔の鬼瓦業界の特徴であり、作った鬼瓦がどこへ行ったのかわからない事が多かったという。ところが中間業者としての「仲買」が消え、瓦屋メーカーの番頭さんに徐々に変わってしまったのである。

今はねえ、各メーカーというのが、瓦屋さんのトンネルが、番頭さんが各地へ飛んで行かれるもので、そういう所から注文を受けたのを頂けると。昔もそう違わんですが、今、番頭さんが、どこのメーカーも有りますもんで、そういう所に行ったりしてお仕事を頂くわけなんですけど。

昔はそういうところからまた一つ、中間業者というものがあって、送り師というただ送るだけの、注文をやり取りするだけの商売も成り立ってたもんで。販売屋というやつですね。製造じゃなくて販売だけで。随分居りました。

「今はそういう人は居なくなつたんですか」と聞くと、

ええ、もう今はねえ、メーカーの番頭さんがそれに代わっちゃったねえ。昔はそういう人がかなりあって、焚き物… まあ、薪やなんかもみんなそういう人がたが持って行って。まあ、ここらだと、伊勢路とか、紀州、和歌山の、あっちの方から木が来ます。その船に、また鬼が行ったり、瓦が行ったり。色んな物を作って送るという、こんな具合な販売屋があつたわけなんで。

昔在った「仲買」は、輸送形態の変化とともに徐々に消えていったのである。ひと昔前までは、瓦は船で運ばれていた。ところが、戦後、道路の整備とともに瓦の運搬はトラック輸送へ切り替わって行ったのである。

昔は瓦屋さんていうのは海辺にねえ、淡路にしろ、石州の所でも。というのは、船輸送がね、昔は船輸送だったから、製品を出すには近い所が良いという具合で、立地条件がまあ大体海岸べたが多い瓦屋さんというのはいいですね。どこのあれでも。静岡でも袋井が… 東京へ出すにもあちらのほうが…。昔は船だったから、とても便宜が良かったんですよ。それに比べたら今のトラック輸送は、まあ、何処でも良い訳ですわ。

変化したのは輸送の変化を直に受けた仲買の人だけではない。日本社会そのものも民間企業の発展により人々のサラリーマン化が急速に進み、鬼板師自体になる人が減少してきたのが実情である。

輸送で変化して来て、そういう仲買というのが段々無くなって来て。それと、やっぱり大きな企業がたくさん出来てきましたね。それだけ、もちろん随分大きくなりましたもんで、ああいう所にみんな採られましたね。若い人はみんなああいう所に行っちゃいました。今、就職難でなかなか…。そういう処は人が要らなくてことで、少しずつ回って来ていますけどね。

鬼栄における大きな変化はプレス機械の導入である。治之はプレス鬼瓦の生産を昭和45、6年頃（1970、1971）に開始している。やはり上記のような社会変化と、鬼栄内部の変化に対応する動きであった。

理由はねえ、私の世代の職人さんが辞められていく年頃だったし、このまま、この鬼栄という看板が無くなってっちゃうような気がしたもんで、何か素人でも出来るような仕事をやってかなきゃいかんという事で、遅いけれど、始めたのがそこらが一つの…。

その頃はまだ作れば売れてる時代だったもんで始めたんですが、ここへ来るとやっぱり出来過ぎちゃって、何処でも出来過ぎると言うのは…。

鬼でも種類が多いから何でも揃うわけじゃないもんで、こういうプレスが無いという事で、始めたわけですが。そういうのは、まあ、何とか売れとったんですが、段々その、他のメーカーさんも、また、売れないというと、おんなじ様なものをまた勘考して作るというふうで、これでまた需要が少なくなっちゃう訳ですわ。段々ねえ。

鬼栄では30種類ほどのプレス型を持っているというが、傾向として、型の種類は増えていくらしい。そのあたりの生産者としての心理を治之は語っている。

同じ物でも何寸、何寸と寸法が有りますもんで。数は沢山あるんですが、同じものを七寸、八寸、九寸と揃えて行かなければならないもんで。それを一つの種類とすると、そう沢山は無いと思うなあ。30種類くらいのもんじゃないかな。

ちょっといいと思うとまた始めちゃうからね、不安になって来て。それでいかなですよ。(笑い)

プレスによる鬼と、手造り鬼の違いを治之は簡潔に述べている。プレス鬼の利点とは何かが良いわかる。

昔は手で作ってるもので、そうそう、競争相手は同業者で…。売る競争はあったんですが、やっぱり出来のいい悪いはあるもので。

(プレス鬼は) よっぽど、型さえ良ければ立派なものが出来ますもので。まあ、素人でもやれるくらい。もうほとんど、機械で抜けるものは、手で作っとっちゃ採算が合わんし。昔はみんなそうやって手で作っとったんだがねえ。

鬼栄では田戸にプレス工場を持っており、現在は3人の職人が働いて、鬼栄の約60%の鬼瓦はそこから生産されている。1999年の時点では、プレス鬼は売り上げの7割を占めていると言われていたので、長引く不況と平板瓦の影響を受け、プレスの鬼瓦の出足がさらに鈍っていることが窺える。

ただ残りの4割は鬼栄では手造りである。治之は実際、事務所の向かい側にある古い造りの手造り工場で何時も働いている。手造りを行う際のポイントについて訊ねてみた。

治之：やはり、あの、鬼面なら鬼面の怖さですね。

高原：怖さというと？

治之：表情です。鬼面の怖いところとか色々ありますねえ。そういう目の開き具合で表情が随分変わってきます。それ一つでも変わりますもので。迫力の在る鬼面を作ろうと思ったら、迫力の在るように作らないかんですよ。だから鐘馗さんなら怖いような鐘馗にせないかんし。表情は大変難しいですね。

このように手造りの鬼瓦は一つ一つに個性が生じ、さらに大きくは鬼栄の鬼瓦といった流派へと発展し、各鬼板屋の特徴を形作っていく。ただ水面下では、職人の移動や、各鬼板屋間での鬼瓦のデザインの借用（見て盗む）が起こるために、自然と地域性が育まれ、三州鬼瓦が出来て行ったのである。治之は鬼瓦のデザインの移動を次のように語っている。

高原：新しいデザインというか、ある種の技術というのは、やっぱり載っている鬼か

ら盗んでくるんですか？

治之：そうです。写真で撮ったりして。それを盗み撮りというかねえ。復元して行くとか…。格好が良いっていうと写してきて、それを真似するとか…。

ところが治之も指摘しているように、プレス製の鬼瓦が生産されるようになると、プレス型を鑄造する鍛冶屋を通して、ある鬼板屋の鬼瓦が他の地方へ流されてしまうことが起き始めたのである。すると元々、ある地方にしかなかった鬼瓦のデザインが、他の地方でも見られる事になり、結果、地域の鬼瓦の特徴が崩れて来ているのが現状となっている。

鍛冶屋さんが淡路の方へ、三河の鬼を、プレスを、機械をどんどん売られるもので、向こうも使われる。ひとつ原型を作ればね、鍛冶屋さんはそれをまた他所へ売ってしょう。地方へ。それだもんで、三河の物も、淡路の物もクシャクシャになっちゃって、三河の鬼が淡路に載るとか、淡路の鬼がこちらに…。もう、そういうのが変わって来ちゃったんです。

鍛冶屋さんは鍛冶屋さんで生きて行かなくちゃいかんもんで、他所へ売れば金になるもんで。そういう具合で、鍛冶屋さんもいい汁を吸っちゃった訳ですよ。

たとえばアメリカ合衆国でこういった問題が起これば知的財産権をめぐる論議が高まり、裁判沙汰へと発展しかねない。ところが鬼師の世界は伝統として独特な技術の伝承の仕方を持っている。いわゆる「見て盗む」である。一般に、特定の師匠は存在せずに、周りの職人たちの流儀を「見て盗む」のが修行である。それ故、プレスの原型の盗用においても、同じ原理が働き、鬼板師がちょうど、自分が気に入った鬼のデザインを「見て盗む」ように、各鬼板屋が互いに良いなと思った原型をプレス型として使っているのである。手造り鬼の場合はこの原理によって各鬼板屋の流儀を越え、地方性が生まれて行き、その土地の伝統となった。ところがプレス鬼の場合は、鍛冶屋という第三者が介在することによって、地方から全国へと鬼の型の市場が広がり、地域の特色が薄れて行ってしまったのである。

鬼柴では手造りの鬼瓦とプレスの鬼瓦を両方、生産しているので、手造りとプレスの鬼瓦の違いや問題点がより鮮明に捕らえられている。ところが平板瓦の急速な普及により、従来の不況とは違う状況が生まれている事が新たな問題となっている。この件に関して治之は次のように言っている。

やあ、何せ、単価が段々厳しくなって来て、鬼が上がらんような屋根に変わりつつあ

るもので…。現状はね。

今までは、あの、波はあっても、その、まだ景気はこう回復して来るってのが、今までのパターンは、ま、大体、こう、在りましたけれども。それが全然、今、見通しは暗いわね。

現在流行の平板瓦による屋根は鬼瓦を通常載せる位置に、特殊瓦という飾りがほとんど無い変形瓦を載せ、屋根の棟端を覆う機能だけに徹するのである。それが治之の言う「鬼が上がらんような屋根」の意味である。治之は別の言葉で次のように表現している。

鬼瓦というのは魔除けのひとつで、どこの家でも魔除けが載せてもらう時代があったけども、その魔除けが載らん屋根が多くなってきて、庭へ坐るようになって来て、段々、その、鬼が地面に降りて来ちゃってね。

治之も、山本鬼瓦の山本信彦とほぼ同様の考えを抱いていることがわかる。自然に対する畏怖心のようなものが現代は薄らいで来ているのである。日本の屋根に大きな変化が起きているのは疑いようが無い。それは取りも直さず日本の景観が変容しつつあることを意味している。

山本鬼瓦系についてその構成メンバーである山本鬼瓦、鬼金、鬼栄を見て来た。既に調査した山本吉兵衛系の鬼板屋群とは性格が異なる系列である。山本吉兵衛系に属する鬼板屋は吉兵衛のもとで働いたことのある職人がそれぞれ興した鬼板屋であり、吉兵衛その人の流儀を直接に受け継いでいる。ところが山本鬼瓦系の鬼板屋は、山本吉兵衛のもとに居た職人から始まった鬼板屋ではない。たまたま鬼板師とは直接の係わり合いも無い神谷佐市が、山本家の本家へ養子として入ったことが物事の始まりである。ただし、その本家は鬼板屋ではなくタバコ屋であった。佐市の義理の祖父に当たる源太郎の弟が、三州鬼瓦の元祖と言われる山本吉兵衛だったのである。

山本吉兵衛は後継ぎになる息子が無く、娘の一人に直弟子の梶川百太郎が養子として入り、二人の男子をもうけたのであった。本来ならこの二人の子が、山本吉兵衛と梶川百太郎の血を受け継ぐ鬼板師となり、山本吉兵衛直系の鬼板屋が築かれ、現代に至っていたと思われる。ところが不幸にして、吉兵衛と百太郎は性格が合わず、上手く行かず、百太郎は山本家を去り、独立して「鬼百」を興したのである。

山本吉兵衛は百太郎の残した二人の男子を鬼板師に育てることはなかった。山本吉兵衛は後継ぎの見通しが無く、鬼板屋としての活動をほぼ終えんとする時に、兄、源太郎の居

る本家へ、佐市が入籍した訳であった。吉兵衛と佐市の間に何があったかはわからないが、二人がこの世で重なり合う期間は一年に満たない。佐市が山本家へ入籍した明治36年5月21日から吉兵衛が亡くなった明治37年4月10日の間である。その後、鬼瓦とは縁の無かった佐市が表でタバコ屋をしながら、裏で鬼瓦を作る様になったのである。山本鬼瓦系の起源にはこのような独特な「ゆらぎ」が存在して、曖昧模糊としているのが事実であり特徴でもある。それ故に山本吉兵衛と血で繋がってはいながらも、山本吉兵衛の鬼板屋群とは一線を画していると言えよう。

## 注

- 1) 佐市の山本鬼瓦がある(現高浜市役所の前にある岡崎信用金庫の近く)地所の一带に当時、鬼忠(杉浦忠太郎)、鬼八(神谷八郎)、鬼兵(石川兵次郎)といった鬼板屋が軒を並べていた。金作は山本鬼瓦だけでなく、こういった近くの鬼板屋へも通い、鬼を習ったのである。

## 参考文献

- 石川篤哉 1999年『信じて耐えて待つ』自家出版。  
 石田高子 1983年『葦のうた』愛知県陶器瓦工業組合。  
 駒井鋼之助 1963年『粘土瓦読本』彰国社。  
 佐藤郁哉 1992年『フィールドワーク 書を持って街へ出よう』新曜社。  
 ——— 2002年『フィールドワークの技法 問いを育てる、仮説をきたえる』新曜社。  
 三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合 2000年『三州鬼瓦総合カタログ2000年度版』三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合。  
 吹田市立博物館 1997年『達磨窯』吹田市立博物館。  
 杉浦茂春編 1982年『高浜市誌資料(六)』高浜市。  
 高浜市伝統文化伝承推進事業実行委員会編 2003年『鬼瓦をつくる～愛知県高浜市の三州瓦～』高浜市伝統文化伝承推進委員事業実行委員会。  
 高原隆 2002年 「鬼師の世界—三州鬼瓦の伝統と変遷—」『文明21』第9号：227-247。  
 ——— 2003年 a 「鬼師の世界—黒地：山本吉兵衛系(1)—」『文明21』第10号：163-189。  
 ——— 2003年 b 「鬼師の世界—黒地：山本吉兵衛系(2)—」『文明21』第11号：81-132。  
 ——— 2004年 a 「鬼師の世界—黒地：神谷春義・岩月仙太郎系(1)—」『文明21』第12号：113-165。  
 ——— 2004年 b 「鬼師の世界—黒地：神谷春義・岩月仙太郎系(2)—」『文明21』第13号：155-175。  
 ——— 2005年 「鬼師の世界—黒地：神谷春義・岩月仙太郎系(3)—」『文明21』第14号：97-111。  
 やまだようこ編 2000年『人生を物語る—生成のライフストーリー—』ミネルヴァ書房。  
 山下晋司, 船曳健夫編 1998年『文化人類学キーワード』有斐閣。  
 ONIX 1992年『鬼瓦総合カタログ』ONIX。